



は 給 食 学 校 今

リポーター 佐々木 幸 子 (赤石沢)

子供の登校時間になっても親は布団の中で子供を起こし、子供は一日の始まりの食事を抜いて学校へ出てしまいます。もし給食がなかったらパンでも持たせたいでしょうか。それともお金を持たせたいでしょうか。

家庭で補えない、不足がちな栄養面を給食に頼っていたような記憶があります。果たして学校給食というのは何なのでしょう。今回は学校給食研究協議会会長でもある花岡小学校の武石校長先生にお会いし、花岡小学校の完全給食の姿を混じえながら伺ってみました。

学校給食が誕生して百年という歴史を持ちながら、大館市で完全給食が実施されているのは

広報市民リポーターだより第三回の今回は、佐々木リポーターが学校給食の現状について取材。また滝沢リポーターは、消費税導入に伴って見直された形となった一円玉についてリポートしました。

小学校十四校中九校、中学校九校中一校、また、ミルク給食だけの学校は小学校で五校、中学校八校とのことでした。花岡小学校では一週間のうち五日給食があり、三回は米飯、二回はパンという型で実施しているそうです。



武石校長(右)と佐々木リポーター(左)

給食を続けて本当に良かったと思うことは?

「うれしいことに子供たちは米

飯給食をととても喜んでくれます。これはとても強く感じます。また、偏食の解消や食事作法の指導ができることなどから、給食は絶対必要なものだと思います。」

これからの給食についての要望は?

「食、そのものが一つの文化だと思います。これに地元木材産業を生かして、温かみのある食器を大いに導入していきたいものです。そしてさらに、食堂方

見直された一円玉

リポーター 滝沢 武雄 (大滝)

式を取り入れることができれば、素晴らしい給食になるでしょう。」

この外、学校給食のセンター方式化などについても伺いましたが、お話しはどれも大変熱心もったものでした。

私たち母親の就労時間がますます増えている今日ですが、食事はただ単におなかを満たすだけ目的ではないような気がし、改めて家庭における食生活と給食とのつながりを振り返ってみる必要性を感じながら帰ってきました。

消費税の導入により、これまでほとんど使用されることになったお金一円玉は、一躍脚光を浴びるようになりました。お金でありながら流通、市場においてさほど必要性のなかった一円玉ですから、やむを得ないこととも思いますが、道路に落ちていてもだれ一人として拾おうとしなかったのが現実であったと思います。

一円は、今のお金の基本であるということをお忘れ去られてしまっているように思います。生活上最も必要な「お金」についての教育の重要性を見直すべきで

はないかと考えます。私たちが子供のころは、お金の大切さを教えられる際によくこんなことを言われました。「一銭を笑う者は一銭に泣く」。お店で物を買うにしても、乗り物に乘ろうとしても、一銭が足りなくてできないことがあるんだと言われた記憶があります。戦後生まれの人たちの中にはよく分からない人もいるかもしれませんが、今の時代なら一銭を一円と言ひ換えていいでしょう。戦後、お金の基本は一銭から一円に変わり、昭和三十年代からの高度成長、景気の上昇とともに一円の価値



買い物の際には一円玉が必要に。右が滝沢リポーター

は生活から遠ざかってきました。しかし、消費税によりその存在価値が再認識され、お金の原点に復したことは喜ばしいことです。一円を粗末にしたり、笑ったりして一円に泣くことのないように心がけましょう。

今度の消費税の主旨は「豊かな福祉社会」をつくるための財源とするものであると信じる次第です。しかし、この税の実施は一党に偏り、深く国民の理解を得なかったために結果は芳しくなく、反発されているものと考えます。

最後に、今後の日本経済の基礎であるお金、一円が価値あるものになることを望み、また豊かな福祉社会をつくるための真の税制がつけられることを願いたいと思います。

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。